

次郎物語(二)

下村湖人



角川文庫

じ ろう もの がたり
次郎物語(二)

全五冊

しもむら こ じん
下村湖人



角川文庫 6737

昭和六十二年四月十日 初版発行
昭和六十二年七月十日 四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)二三八—八四五—

営業部(〇三)二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

次郎物語

(二)

下村湖人



角川文庫 6737

第二部

一 それから

母に死別してからの次郎の生活は、見ちがえるほどしつとりと落ちついていた。彼は、なるほど、はたから見ると淋しそうではあった。彼の眼の底に焼きつけられた母の顔が、何かにつけ、食卓や、壁や、黒板や、また時としては、空を飛ぶ雲のなかにさえあらわれて、ともすると、彼の氣持を周囲の人たちから引きはなしがちだったのである。しかし、母が、臨終の数日まえに、

「あたしは、乳母やよりももっと遠いところから、きっと次郎を見てあげよ。だから、……だから、腹が立ったり、……悲しかったりしても……」

と息をとぎらせながら言った言葉が、いつも力強く彼の心を捉えていた。で、彼自身としては、彼が孤独に見える時ほど、かえって氣持が落ちついていたとも言えるのだった。

彼は、正木のお祖母さんといっしょに、よくお墓詣りをした。お墓の前にしゃがむと、彼は拝むというよりは、じっと眼をすえて地の底を見透そうとするかのようであった。彼は、母の屍体が日ごとにくずれて行っているなどとは、微塵も思いたくなかった。彼が地下数間のところに想像するものは、いつも、ほのかな光のなかにうき出した大理石像のようなものだった。この大理石像は、お墓詣りがたび重なるにつれて、いよいよ鮮明になって行った。しかも、不

思議なことには、その顔は、彼の記憶に残っている母の顔そのままのものではなかった。それは、もっと美しい、神々しい顔だった。やや伏目に半眼にひらいた眼つきには、どこかに観音さまを思わせるものさえあった。

次郎は、学校の綴方の時間に、このごろ感じたことを何でもいいから書け、と先生に言われて、「地下に眠る母」という題で、お墓詣りのおりのこうした感じを、そのまま書いて出した。すると、そのつぎの綴方の時間には、先生は、みんなのまえでそれを朗読したあと、黒板の横の壁にピンで貼り出した。題のうえには三重圈が朱で大きく書いてあり、文末には、

「先生も思わず静かな気持ちに誘いこまれてしまいました。君の孝心がこの名文を書かせたものと思います」

と記してあった。

次郎は、しかし、先生が朗読をはじめた瞬間、後悔に似た感じに襲われた。ひとりで大事にしまっておいたものを、だしぬけに人に見つかったような気がしてならなかったのである。彼は最初顔をまっかにした。が、朗読が終るころには、むしろ青ざめていた。そして、休み時間になって、みんなが黒板のそばに押しよせた時には、飛びこんでいってそれを引っぱがしたいような気にさえなった。

次郎にとっては、彼の記憶に残っている実際の母の顔と、墓詣りをするうちに描き出した母の顔とは、決してべつべつのものではなかった。彼自身では、母の顔を二様に思い浮かべているとは、ほとんど意識していなかったほど、まったく自然に、時に応じて、そのどちらかが彼

の眼に浮かんて来たのである。彼が、彼なりに社会を持っている場合、つまり、学校や、家庭や、その外の場所、周囲の人たちと何かの交渉がある場合に、自然に彼が思い出すのは、彼の記憶に残っている実際の母の顔であり、仏壇の前に坐ったり、墓詣りをしたり、夜中にふと眼をさましたりするとき、ひとりでに浮かんて来るのは、観音さまに似た母の顔だった。

もっとも、月日がたつにつれて、この二つの顔は、次郎のその時の気分しだいで、どちらになることもあった。そして、三、四か月もたったころには、彼は自分でも気づかないうちに、観音さまに似た顔ばかりを思い出すようになっていたのである。

彼は、乳母のお浜におりおり手紙を書くことを忘れなかった。お墓詣りをした時には、葉書ぐらいはきまって出した。また、綴方の時間に「地下に眠る母」を書いて出したのを後悔していたにもかかわらず、お浜には、三重圏のついたその綴方をそのまま送ってやり、教室で先生に朗読してもらったことまで書きそえてやった。

お浜に手紙を書く時の彼の気持は極めて自由だった。彼は、彼自身のことについてはむろんのこと、彼の周囲のことについても、町の本田一家のことについても、彼の知っていることなら、何でも書いていいような気がしていた。もっとも、実際に書いたのは、たいていはお浜が喜びそうなことばかりだった。本田のお祖母さんについては、ただ一度だけ、「お祖母さんは、まだ僕をあまり好きでないようだが、僕はもうちつとも困らない」と書いたきりだった。

これは、しかし、いやなことをつとめて避けようとする彼の心づかいからではなかった。お浜へあてた手紙を書き出すと、彼は、ちょうど甘い果物にでもしゃぶりついているような気に

なって、自然、不愉快なことを書く気がしなかったのである。

むろん、墓詣りをしたおりの彼の手紙には、母の追憶やら、墓場の光景やら、それに伴う彼自身の感傷やらが、かならず何行かは書きこまれてあつた。しかも、時としては、彼はそのために誇張としか思えないような文句まで考え出すのだった。これは、しかし、彼の母への思慕の不純さを示すものとはいえなかった。彼は、まだ、思いきりお浜に甘えてみたい氣持だったのである。母への思慕を濃厚に表わすことが、今では、お浜への思慕を濃厚に表わすことであり、彼はそうすることによつてのみ、存分にお浜に甘えているような氣持になることが出来たのである。

次郎にとつて、何の自制心も警戒心も必要としないただ一人の相手、嘘であろうと、誇張であらうと、そのままにうけ入れてくれるただ一人の相手、そして、かりに腹を立てあらうとしても、腹を立てあらうことそのことが、愛のしるしでさえあるようなただ一人の相手、それは今でもお浜だけであるということを、読者はやはり忘れてはならない。

ところで、次郎は不思議にも、お浜自身に対する彼の思慕を、彼の手紙のなかに、あからさまに書いたことなど、一度だつてなかった。彼は、お浜自身に関しては、いつも手紙の末尾に、「乳母や、では、たつしやで暮しなさい」と書くだけだった。そのほかに、もし彼のお浜に対する深い愛情を示す直接の言葉を求めるとすれば、おそらく、母の葬式後別れてからの最初の手紙に、「僕が大きくなるまで丈夫にしていして下さい」と書いたのだけであつたらう。これ

もしか、何も不思議なことではなかった。というのは、次郎のお浜に対する思慕は、次郎に

としてはあまりにも自然であり、それを意識的に言い表わす必要など、彼は少しも感じていなかったからである。

お浜からの返事は、いつも簡単だった。たいていは郵便葉書に、まず手紙を受取ったお札を書き、そのあとに、勉強して一番になつてもらいたいとか、おとなしくせよとか、病氣をするなとか、お墓詣りを怠るなとか、いったような意味のことを、きまり文句でしるしてあるに過ぎなかった。たまには、まるで返事さえ来ないこともあった。次郎は、それを物足りなく感じながらも、少しも不服には思わなかった。というのは、彼は、お浜が字が書けなくて、いつも誰かに代筆させていることをよく知っていたからである。

もつとも彼は、その代筆者を多分お鶴だろうと想像していた。そしてもしそうだとすると、もつと何とか書きようがありそうなものだ、お鶴はもう僕のことを忘れてしまっているのだから、などと考えたりした。

彼は、母を思うとすぐお浜を思い出し、お浜を思うときつと母を思い起した。彼が二人からうけた印象は、色も匂いもまるでちがったものではあったが、それは彼にとって決して調和しがたいものではなかった。それどころか、彼は、いわば、高く澄みきった暁の星を、咲きさかる紫雲英畑の中からでも仰ぐような気持で、二人の思い出にひたることが出来たのである。暁の星と紫雲英畑とは、もはや彼にとって同時に必要なものになっていた。暁の星だけでは、清澄に過ぎて寂しかったし、紫雲英畑だけでは、何か知ら心の奥に物足りなさが感じられた。彼は、この二つを同時に持つことによって、緊張感と幸福感とを共に味わいつつ、無意識のうち

に、彼自身の魂を、永遠と現実との二本の軌道のうゑに正しく転じはじめていたのである。

むろん、彼の周囲には正木一家のひとびとがいて、あたたかく彼を見まもってくれた。正木のお祖父さんは、やはり懐しくも怖くも思われる人だった。お祖母さんは母の死後いよいよやさしくなってきた。墓詣りのたびごとに、母の思い出を語り、ついでにお浜のことを言い出して次郎を慰めるのは、いつもこのお祖母さんだった。次郎は、しかし、母の死後、この二人が目立って元気がなくなつたように思えて、何となく淋しかった。

謙蔵夫婦や、従兄弟たちには、べつに変わったところもなかった。どちらかと言うと、次郎自身、彼らに対して不必要に氣をつかったり、小細工をしたりしなくなつただけに、彼らの次郎に対する態度にも、一層こだわりがなくなつて来たと言えたであらう。

ともかくも、こうして、次郎は正木一家のひとびとに取りかこまれ、しばしば、お浜に手紙を書き、自由に母の追憶にふけてゐるかぎり、大して不幸な生活をおくつてゐるとは言えなかつたのである。

もつとも、龍一の姉の春子が、いよいよ正式に縁づくことになり、母の死後間もなく、東京に発つて行つてしまつたと聞いた時には、腹も立つたし、悲しくも思った。このまゝ彼女が東京に行つて、一旦帰つて来た時に、すぐにも訪ねたいと思つたが、そのころは母が危篤で、学校も休んでいたし、いよいよ葬式がすんで学校へ通えるようになってからも、忌中におめでたまゑの人の家を訪ねるものではないと、正木のひとびとに言いきかされていたので、とうとう会えないでしまつたのが、とりわけ心残りでならなかつた。しかし、それも母の死という大打

撃のあとだったせい、このまえ春子が東京に行くと言った時にくらべると、不思議なほど、心にうけた痛みが軽かった。そして、時がたつにつれて、学校で龍一の顔を見ても、めったに春子のことを思い出さなくなり、たまに思い出しても、それは、春子の東京土産にももらった硝子製のライオンとともに、むしろ甘い追憶の一つになりかけて来たのである。

ただ、彼の心にいつも暗い影になってこびりついていたのは、やはり本田のお祖母さんだった。彼は、もう一人でも町に行けるようになっていたので、行きたいときえ思えば、土曜ごとに泊りがけで行けるのだったが、実際に行くのは、せいぜい月一回ぐらいのものだった。それも、自分から進んで出かけようとしたことなど、ほとんどなく、たいていは、正木の老人たちにつれられたり、あるいはすすめられたりして、しぶしぶ出かけるといったふうだった。

それも、しかし、本田のお祖母さんの彼に対する仕打が、以前より一層ひどくなって来ている以上、無理もないことだった。本田のお祖母さんは、このごろでは、次郎をまるで本田の子供だとは思っていないかのようにあしらった。小学校を出たあと本田に帰って来られては迷惑だ、と言わぬばかりの口吻をもらしたことも、一度ならずあった。ある時など俊亮に向かって、「この子もやはり中学校に出す気なのかえ」とか、「正木でお世話ついでに何とか考えてもらったら、どうだえ」とか、次郎を目の前に置いて、平気でそんなことをいったときさえあった。

俊亮は、むしろそれには取りあわなかったが、次郎としては、将来の希望を打ちくだかれたような気がして、その時は正木に帰ってからも、永いこと暗い気持ちになっていた。

何よりも、次郎を不愉快にしたのは、お祖母さんが彼に向かって、正木の人たちのことを何かと悪く言うことだった。しかも、その悪口は、どうかすると、亡くなった母の上にまで飛んで行くのだった。

「親の氣位が高いと、自然その娘も氣位が高くなるものでね。このお祖母さんは、お前たちのお母さんでどれほど苦勞をしたか知れやしないよ」

これが、何かにつけ、お祖母さんの言いたがることだった。また、

「氣がきつくて、素直でないとこころは、次郎がお母さんそっくりだよ。恭一なんかお母さんにはちっとも似ていないがね」

などとも言った。これには、はたで聞いていた恭一も、いやな顔をした。次郎はなおさらいやだった。自分が悪く言われるのは、慣れっこになっていて、もうさほどには腹も立たなかったが、彼にとって神聖なものになりきっている母が少しでも傷つけられることは、何としてもたえがたいことだった。

彼は、しかし齒齧みをしてそれをこらえた。こらえなければ、一層母が悪者になるような氣がしたのである。

彼が本田に行きたがらない理由は、正木一家にも、むろん、よく解っていた。で、正木のお祖父さんは、最近しばしば俊亮にそのことを話して、次郎が中学校へ入学したあとの始末について、十分考えてもらうことにした。しかし、俊亮はその話になると、いつもため息をつくだけだった。

寄宿舎に入れる手もあり、また、少しは無理でも正木の家から自転車で通わせるという方法も考えられないではなかったが、いずれにせよ、近くに自家があるのにそんなことをしては、ますます次郎をひがましてしまうのではないか、という心配が俊亮にはあった。実は、次郎本人が知ったら、その方をどのくらい望んだか知れなかったのだが、俊亮としては、そのことについて次郎の気持を訊いてみることにさえ、よくないことのように思われるのだった。それに、商売の方も、不慣れなために、とかく手ちがいだらけであり、次郎のために特別の支出でもすることになれば、それこそお祖母さんが黙ってはいまいし、正木から通わせることにすればその方の心配はないとしても、世間の思わくというものを、元来そんなことにはわりあい無頓着な俊亮も、さすがに無視するわけにはいかなかったのである。

（いっそ養子にでもやってしまおうか）

俊亮は、ふとそんなことを考えてみたこともあった。しかし、それは、彼の良心、——というよりは、彼の次郎に対する愛情が許さなかった。

彼は、次郎を見ると、このごろ涙もろくさえなっていたのである。

この問題は、実を言うと、お民の葬式がすむとすぐから、ないない誰の気にもかかっていたことで、法事のたびごとに、ひそひそと囁かれていたのだが、四十九日が過ぎ、百か日がすぎ、その年も暮近くになって、やっと正木の老人から俊亮に話し出したのだった。

それでも、結局、解決がつかないままに年があけてしまったのである。

二 万年筆

「次郎、父さんは、今日正木へ行く用が出来たんだが、いっしょに行かないか」

朝飯をすまして、火鉢のはたで、手紙の封をきっていた俊亮が、だしぬけに言った。

次郎は正月を迎えるために本田に帰って来ていたが、むろん、一日だってお祖母さんに不愉快な思いをさせられない日はなかった。恭一や俊三といっしょに、父と一度映画館につれて行ってもらったほかに、正月らしい気分は何一つ味わえず、とりわけ、食卓での差別待遇が、母にわかれてからの彼のしみじみとした気持を、めちやくちやしそうだった。で、休みはまだあと二日ほど残っていたが、父にそう言われると、彼は飛び立つように嬉しかった。

「すぐ行くの？ 僕、じゃあ、カバンを取って来るよ」

彼は、そう言って、二階へかけあがった。

「だしぬけに、どうしたんだね」

と、まだちやぶ台のそばで茶を飲んでいたお祖母さんが、不機嫌そうに、俊亮にたずねた。

「いや、歳暮にも無沙汰をしていますし、どうせ一度行って来なければなりません」

「でも、今年はまだ忌があるんじゃないのかい」

「そりやそうです。しかし、べつに年始というわけではありませんから」

「じゃあ、松の内でも過ぎてからにした方が、よくはないのかい。あんまり物を知らないように思われても、何だから」

俊亮は苦笑した。そして、ちょっと何か考えていたが、

「じつは、今、正木から至急の手紙が来ましてね」

と、膝の前に重ねて置いた四、五通の手紙に眼をやった。

「何を言っただけだ」

お祖母さんは、急いでちやぶ台のそばをはなれ、不機嫌と好奇心をいっしょにしたような眼つきをして、俊亮の火鉢のまえに坐った。

「今日の夕刻までに、是非来てくれというんです」

「そんな急な用件って、何だね」

「それは、行ってみないと、はっきりしませんが……」

「何とも書いてはないのかい」

「ええ……」

俊亮の返事は少しあいまいだった。

「用件も書かないで、人を呼びつけるなんて、ずいぶん失礼だとは思わないのかい」

俊亮はまた苦笑しながら、

「親類仲でそうこだわることもありますまい。それに、こちらのことを気にかけてのことにらしいのですから」

「こちらのこと？　すると何かい、こちらのことで何か相談がある、と書いて来ているんだね」